

『万葉集』巻頭の「雄略歌」について

徐 送 迎

『万葉集』巻頭の雄略歌について、長い間、多くの論争があり、研究者たちは文学、歴史学、民俗学などの視点から研究して来たが、一体、なぜ『万葉集』の巻頭は雄略歌なのか。学界では「仁者は仁を見、知者は知を見る」という段階で、まだ意見が一致していない。

過去の研究状況を回顧してみると、巻頭雄略歌に対する解釈はさまざまであるが、あくまで伝承であり、自作とは認めにくいという点では、殆ど異論がないようである。つまり巻頭雄略歌は「仮託」されたものと考えられている。そこで、どうして雄略天皇の歌に仮託したのかが、問題の焦点になる。諸見解の中では、「実力説」と「靈力説」が注目されている^①。

(一) 実力説

- A 編者（たち）は、とくに、五世紀の雄略天皇という政治的存在、またはその治世を重視したのではなく、歌謡の多いこの天皇に格別の関心をいだいたらしいのである。

（北山茂夫氏『万葉集とその世紀』上・新潮社・昭和五十九年）

- B 私は、雄略・舒明が巻頭の位置を与えられたのは、成立当事の国際状況意識の反映と考える。……政治的存在、それも東アジアにおける政治的存在こそが、巻頭歌人たらしめたと考えるのである。

（山口博氏『王朝歌壇の研究』文武聖武光仁朝篇・桜楓社・平成五年）

両氏はそれぞれ政治、文学の視野に立ち、この謎を解明しようとした。北山茂夫氏は政治的存在と関係がなく歴史上において雄略天皇は歌謡が多くて格別

の関心をもたれたので選ばれたと論じている。一方、山口博氏は、中国の正史にも高く評価された雄略天皇が、国内外において、重要な存在であったので、その歌が巻頭に選ばれたと指摘している。両氏は研究の立場が異なるが、客観的結論としては共通点があり、両方とも雄略天皇の才能、実力及びその影響力を認めている。

(二) 霊力説

- A 『万葉集』には、問題の雄略御製以外にも舒明朝以前の歌が数首収められている。……いずれも後の世の人がその人々の作と見立てた仮託の歌ではあるが、この仮託された人々はすべて『古事記』下巻の著名人に限られており、『古事記』下巻の時代が、万葉人にとって同じ「古代」でも特別な時代として意識されていたことをはっきり示している。

雄略天皇は、この“近つ世”における花形であった。『古事記』雄略の条において、雄略は勇武にすぐれた天子であると同時に、歌の道に格別秀でた天子として描かれている。すなわち、「近つ世」において、天皇を主人公とする歌謡物語は雄略の条に集中している。

(伊藤博氏・稲岡耕二氏編『万葉集を学ぶ』第1集・有斐閣・昭和五十二年)

- B 「歌」の霊力を身に付着させ、かつ揺り動かした格別の英雄として、普通的な伝承のなかに生きつづけたのが雄略天皇だった。

(『日本文学全史』1 上代・学燈社・昭和五十三年)

- C 『古事記』『日本書紀』などに伝えられる天皇の事績は豊富である。これはかならずしも事実を伝えたものではないが、多量にして多彩な伝承を持つこと自体、雄略天皇が特異な重要な存在と意識されていたことを示す。……『万葉集』の巻頭歌の作者が雄略天皇と伝えられていること、『日本霊異記』の巻頭の説話（同書に収める仏教渡来以前の唯一の説話）が雄略天皇にかかわるものであることもこれと無関係であるまい。……一時期を画した古き代の天皇の代表として、雄略天皇は『古事記』『日本書紀』『万葉集』を中心とする時代の人々に伝承されていた。

（『日本古典文学大辞典』曾倉岑氏執筆・岩波書店・一九八五年）

このように、雄略天皇は「『歌』の靈力を身に付着させ、かつ揺り動かした格別の英雄として」、「一時期を画した古き代の天皇の代表として」、「この“近つ世”における花形であった」ので、その名を借りて雄略歌を卷頭にするのが、靈力説の核心である。

それぞれは優れた説であるが、本発表では中国の古代文学文化が日本の古典に深い影響を与えたという歴史背景のもとに、フランス学派の影響研究の立場から、文学史上、『万葉集』と同じ位置を占める『詩経』の卷頭と比較し、これによって卷頭雄略歌の謎を解明するために一案になればと考える。

まず、両卷頭を挙げて見よう。

籠もよ み籠持ち 掘申もよ み掘申持ち この岳に 菜摘ます兒 家聞
かな 名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れ
しきなべて われこそ座せ われこそは 告らめ 家をも名をも

（『万葉集』・雄略歌）

関関雉鳩	関関たる雉鳩は	
在河之洲	河の洲に在り	
窈窕淑女	窈窕たる淑女は	
君子好逑	君子の好逑	（第一章）
参差荇菜	参差たる荇菜は	
左右流之	左右に之を流む	
窈窕淑女	窈窕たる淑女は	
寤寐求之	寤寐に之を求む	
求之不得	之を求めて得ざれば	
寤寐思服	寤寐に思服す	
悠哉悠哉	悠なる哉 悠なる哉	
輾轉反側	輾轉反側す	（第二章）
参差荇菜	参差たる荇菜は	

左右采之	左右に之を采る	
窈窕淑女	窈窕たる淑女は	
琴瑟友之	琴瑟之を友とせむ	
参差荇菜	参差たる荇菜は	
左右采之	左右に之を采る	
窈窕淑女	窈窕たる淑女は	
鐘鼓樂之	鐘鼓之を楽しむ	(第三章) (『詩経』・関雎)

十三世紀、学僧の仙覚は『万葉集注釈』において『万葉集』を解釈する際、『詩経』を引用し、両詩歌集の巻頭について、次のように述べている。

万葉集巻頭モ恋也。夫婦ハ人倫ノ始ナレハ、巻頭ニ恋ノ哥ヲ置コト、甚深ノ義也。毛詩ニ関雎篇ヲ巻頭ニ置コト、是又后妃ノ徳ヲ第一トス。次ニ此岳ニ菜採須臾ト云リ。菜摘ハ、春也。春ハ万物生スル時ナレハ、四季ノ始也。故ニ古今集ヨリ以後ノ撰集、春ノ部ヲ巻頭トス。(中略) 故ニ此巻頭、恋ニシテ春也。

『万葉集』と『詩経』の巻頭の共通点としては、両方とも「恋ニシテ春也」と指摘した。仙覚の論述は卓見であるが、両巻頭の間にその深い影響関係を更に探求する必要がある。

比較的に分析して行くと、両巻頭ともその発想から内容、表現まで、実に類似している。

発想——同じく春の恋である。

内容——男主人公は、山菜を摘む女が好きで彼女を求める。

形式——「菜摘」を通じて展開して行く。

その相異は、「雄略歌」が天皇の威厳で歌った恋歌で、人を威圧する雰囲気をも有する点である。支配者として恋情を吐露したと同時に「そらみつ大和の国は すべてわたしが従えているのだ。すべてわたしが支配しているのだ」という満々たる政治抱負も表明されている。

一方、「関雎」の「君子」は「君主」であると、詩中に明記されていないが、

封建時代の中国では、この「君子」や詩意に対して、全く「経学」としての解釈であった。

現存一番古い注釈書である毛亨等の『毛詩故訓伝』序に

関雎后妃之徳也。風之始也。所以風天下。而正夫婦也。故用之郷人焉。用之邦国焉。風。風也。教也。風以動之。教以化之。……是以関雎楽得淑女以配君子。

とある。儒教の思想のもとに、この情詩を「后妃の美德」を賛美する詩にし、「関雎」は「風」のはじめとして天下を風化し、夫婦のあり方を正しくさせるという。『毛詩序』は「君子」に関する解釈が多少曖昧であったが、この「君子」は「后妃」の「配偶者」であるので、言うまでもなく「君主」であろう。その後、後漢鄭玄は『毛詩伝箋』では、「正夫婦」の大切さを明白に指摘した。

夫婦有別。則父子親。父子親。則君臣敬。君臣敬。則朝廷正。朝廷正。則王化成。

男女のあり方を正しくすれば、父と子、君と臣の関係は、すべてうまく行く。最終的に「王化」された理想の社会になるという。鄭玄の解釈は『毛詩序』と同じで、儒教の政治色彩に溢れている。

唐朝になると、孔穎達は太宗皇帝の命令を受け、官修で『毛詩正義』を編纂した。これは南北経学家の見解を融合してできたものであるが、「疏不破注」の原則のもとで、より詳細に、明確に注釈した以外、大体『毛詩故訓伝』と『毛詩伝箋』とは相違がないと言える。「関雎」に対して

但詩理深広。此為篇端。故以詩之大綱并挙於此。分為十五節。当節自解次第。於此不復煩文作関雎詩者。言后妃之徳也。……二南之風、實文王之化。而美后妃之徳音。以夫婦之性。人倫之重。故夫婦正。則父子親。父子親。則君臣敬。是以詩者歌其性情。陰陽為重。所以詩之為体。多序男女之事…
…

と解釈している。孔氏の『毛詩正義』では、巻頭「関雎」の重要性をさらに強調した。巻頭に「関雎」という「男女」の詩を置く目的、その深い意味は、詩

集全体の「大綱」とすることにあるという。「正夫婦」は中国儒教において、実に大切な思想である。『礼記』に

古之欲明明徳於天下者。先治其国。欲治其国者。先齊其家。欲齊其家者先修其身。

とある。これはのち儒教の「修身、齊家、治国、平天下」という理想的思想体系にもなっている。国家を統治する前提としては自分自身の修養を高め、個人の家を立派に管理することである。逆に自分の家庭さえ治めることができないなら、国家、天下を支配することは、むしろ空言である。

孔穎達の「二南之風、實文王之化」という指摘は、初めて詩中の「君子」を周の文王と結んだ。その後、宋人朱熹は『詩集伝』で明確に「君子則指文王也」と指摘した。

以上のように、経学家の解釈によれば、「関雎」の「君子」は、「君主」であり、或いは「文王」である。要するに、両巻頭における男主人公の身分も同じで国を支配する天皇、君主である。万葉時代の人々、特に雄略歌の作者は「関雎」をどのように理解していたか、知ることができないが、「雄略歌」から、「関雎」の「窈窕淑女、君子好逑」という男女の恋情と、経学家の「齊家」「治国」「平天下」の儒教理想を両方とも見出すことができる。「雄略歌」に表現された「人倫の重」とする「男女」と満々たる「治国」の政治抱負は、殆ど経学家の注と同様ではないであろうか。そこで、『万葉集』と『詩経』の巻頭の類似は偶然ではなく、「雄略歌」の作者は「関雎」および『毛詩故訓伝』と『毛詩伝箋』、『毛詩正義』などの注釈の影響を受け、巻頭歌を作ったという可能性が十分考えられる。

『万葉集』が編纂された当時、宋人朱熹の説がまだなかったが、編者は漢人鄭玄、唐人孔穎達の注疏を読んだはずであろう。653年に成立した『毛詩正義』は、鄭玄の『毛詩伝箋』に基づいたもので、当時の中国では権威のある、勅撰注釈書であった。『詩経』がいつ日本に伝来したかどうかは、はっきり言えないが、少なくとも七〇一年、唐の制度を手本にし日本国家の体制を規定した

『大宝律令』が成立した時、或いはその以前であると言えよう。当時、日本の官吏任用試験制度が唐朝の科挙制度の影響を受け、日本の知識人は官吏になるために、『毛詩』等中国の典籍を習わなければならなかった。しかも『律令・学令』において鄭玄の注釈した『毛詩』を習うと明記している。また鄭玄の『毛詩伝箋』、孔穎達の『毛詩正義』は、いずれも藤原佐世の『日本国見在書目録』に見え、万葉時代、勉強された『詩経』は主にこれらの注釈書であることが、間違いないであろう。

一方、『万葉集』の三大部立は『詩経』における「風」、「雅」、「頌」の三分類から影響を受けたと、既に指摘されている。例えば、伊藤博氏は『万葉集の表現と方法』に「宮廷歌などを中心とする万葉の雑歌は毛詩の「雅」に、死に関する歌を集める万葉の挽歌は毛詩の「頌」に、そして、男女の愛恋の歌を中心とする相聞は毛詩の「風」にそれぞれ内容が類似していることが知られる」という^②。

更に日本の『詩経』に対する早期研究から考察すれば、経学家の注疏は当時日本の官僚文人に大きな影響を与えたことが分かる。

いま知り得る最初『詩経』研究において、十世紀三、四十年代に作られた『作文大体』は、その一つである。この漢詩文を作るための一般的作文知識書の中に『詩経』の「六義」について、次のような説明がある。

詩六義者風賦比興雅頌也。一風者。鑽仰賢聖詠述遺風是也。二賦者。賦言鋪也。直鋪陳令之改善惡也。三比者。不直言時政之失。取比類而言。或云比物也。四興者。直言時政之義。取善喻之也。五雅者。正也。言今之正道可為後代之法也。六頌者。誦也。令德改美盛德之形容是也。

これらの解釈は言うまでも無く中国の経学家によるもので、政教主義の色彩が相当に濃厚である。

長徳年中（995~999年）紀齊名により編纂された『扶桑集』に「仲春積奠毛詩講後。賦詩者志之所之。併序」という文章がある。

是以仲月之春。初丁之日。散苾芳於和風之砌。明德惟馨。奏鏗鏘於媚景之

庭。声楽以正。於是礼畢講經。□罷開宴会。盈耳者四百年之風雅。洋々猶遺。……夫詩之為言志也。藏於心。牽於物。尋其所本。偏是為志。名其所之。乃是日詩。……苑柳隰桑之風。寂寞於歲月。汝墳漢廣之詠。衍溢乎康衢。至矣盛矣。太平之化不可得而稱計者。請歌治世之言。將貽採詩之職云爾。聞說篇三百。蓋皆志所之。孕音凝在意。牽物散如期。動入風雲色。抽為草木詞。當初庭訓絕。唯詠蓼莪詩。

当時孔子を祭祀する「釈奠」の後、經典の講習がある。文章では、言葉を極めて『毛詩』を聞くときの感動を描き、具体的な作品を挙げ、評価したと同時に、『毛詩序』における「詩言志」の思想を繰り返して述べた。注目すべきは「太平之化」や「治世之言」という表現は『詩経』の詩の内容と全く関係なく、經学家の注によるものであった。

同じく「仲春釈奠毛詩講後。賦詩者志之所之」というタイトルと内容の文章がまた『本朝文粹』にも収録されている。

その後、藤原公任の『古今集』の『序注』に、『詩経』の「六義」に対する論述もあった。彼の研究は今までの研究者と異なり、自分の関心により、幾つかの加減があつて、個人の文学観念が強く表現されていた。例えば「風」について

公任卿注云。一曰風。注云。譬喻不斥言也。今諷言体也。風化天下。正夫婦。故用之鄉人云々。尤便於恋歌。

という。藤原公任は、「風化天下」や「正夫婦」等經学家の説を引用したが、最終的に「夫婦」に目をとめ、「尤便於恋歌」と、自己流に解釈していた。「風」は恋歌の如くと、これはそれまでの經学家は誰も言っていないことである。作品を読んだ直感のままで率直に自分の認識を述べた藤原公任の研究方法は、文学観がだんだん形成して行く古代の日本人の『詩経』を理解する一つ新しい動態を示したと言える。しかし、事実としては早期の『詩経』研究及び中世、近世の研究は殆ど經学家の注に従い、自らの解釈が稀であった。

上に取りあげた仙覚の両卷頭に対する解釈でも、經学家の影響がはっきり見

える。『万葉集注釈』における「夫婦ハ人倫ノ始」（以夫婦之性。人倫之重）や「巻頭ニ恋ノ哥ヲ置コト、甚深ノ義也」（但詩理深広。此為篇端。故以詩之大綱并挙於此）、「后妃ノ徳」（関雎后妃之徳也）などの論述はいずれも『毛詩故訓伝』、『毛詩伝箋』、『毛詩正義』によるものであった。また「春ハ万物生スル時ナレハ、四季ノ始也」という意識も、中国から受容されたものであろう。中国の典籍には古代の中国人の春に対する認識が多く記録されている。『周礼』の「中春之月。令会男女」、班固『白虎通』の「嫁取以春何也。春天地交通。物始生。陰陽交接之時也」、劉熙『釈名』の「春之為言蠢也。物蠢而生也」等はいずれも「春は万物の始」の思想を表している。

十七世紀、万葉研究の舞台で活躍していた学僧契沖が、『万葉代匠記』において、『詩経』の詩を約六十首も引用し、『万葉集』の歌と『詩経』の詩を対照的に並べ、『詩経』の詩句で『万葉集』の歌を解釈しようとした。契沖の研究は、やはり忠実に中国経学家の説を原文のまま伝え、それについての説明や個人の考え、認識などは、殆ど見せなかった。

従って、中国典籍に精通している『万葉集』の編纂者が雄略歌を巻頭に置くのは、単に『詩経』の巻頭を模倣した恋歌だからという理由のみではなく、さらに雄略歌の後半に表現された「治国」「平天下」の「大一統」の政治理想が、編纂者の政治意図と非常に一致しているからであろう。単純に雄略歌標目の「御宇」という言葉の使用によっても編纂者の政治的意図が現れているのではないだろうか。しかも、この巻頭は天皇系の歌が中心とする国見歌や天皇の権勢を讃える、天皇の満々たる政治抱負を詠む巻一、巻二の配列にもびつたりと合致している。全般的に大陸文化を受け入れた政策のもとに誕生した『万葉集』の目的について山口博氏は次のように指摘している。

《万葉集》の内容、標目の「御宇」という言葉、冒頭の積極外交推進の雄略歌と舒明歌、このように並べると、『万葉集』がなぜ作られたのか、どのような性格なのか、実に明瞭ではないか。風雅の営みとして、《万葉集》は作られたのではない。律令制国家を賛え、諸藩を冊封体制下に置き、

大唐を意識しつつ、東アジアにおける国際的立場を主張する文学的営みこそが、《万葉集》の編集の目的だったのではないだろうか^③

確かに『万葉集』の成立には政治的な目的があると言わざるを得ない。

以上のように、雄略歌が巻頭に選ばれたのは、「雄略歌」の作者、『万葉集』編纂者の『詩経』に対する模倣であり、積極的に儒教思想を受け入れた結果であると言え、この「人倫の始」とする春の恋歌には、律令国家体制のもとに、「大一統」の理想及び自信満々たる前向きな姿勢が表現されている。

〔注〕

- ①「実力説」と「霊力説」は筆者が纏めて名付けたものである。
- ②伊藤博氏『万葉集の表現と方法』上（塙書房・昭和五十年）
- ③山口博氏『王朝歌壇の研究』文武聖武光仁朝篇（桜楓社・平成五年）

＊討議要旨

大黒貞明氏は、『古事記』にある歌との関係はどうか、と尋ね、発表者は、『万葉集』の歌は伝承されてきた草摘みの歌と恋の歌を合わせて巻頭歌にふさわしく作ったもので、『古事記』の歌とは変化している、と答えた。

山口博氏は、①仙覚は類似していると述べているだけで影響関係までは言っていないのではないか、②契沖は『万葉代匠記』で約60首の『詩経』の詩を引用しているが「関雉」は引用しているのか、③『万葉集』の他の歌に「関雉」が影響を与えたということはあるのか、と尋ね、①その通りである、②引用していない、③ない、と答えた。